

第3回栗東市ごみ処理施設整備検討委員会 議事概要

- 1 開催日時：令和2年12月21日（月） 10時30分～12時30分
- 2 開催場所：栗東市環境センター 2階多目的室
- 3 出席者
委 員：金谷委員（委員長）、柳井委員（副委員長）、浅利委員、濱田委員、田中委員
川崎委員、大角委員、
事務局：栗東市（5名）、建設技術研究所（3名）
傍 聴：2名
- 4 次 第
 - (1) 開 会
 1. 委員長挨拶
 - (2) 確認事項
 1. 前回議事概要の確認について【第1回議事概要】【第2回議事概要】
 - (3) 協議事項
 1. 技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果について
技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果【資料1－1】
技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果の詳細について【資料1－2】
必要敷地面積について【資料1－3】
技術動向調査（好気性発酵乾燥方式）の結果【資料1－4】
 2. 処理方式について
処理方式選定の考え方【資料2－1】
処理方式の比較検討（可燃ごみ処理施設）【資料2－2】
 3. 事業方式検討調査（メーカーアンケート第2回）の結果について【資料3】
 4. 公募条件について
自治体等におけるごみ処理施設用地の公募事例について【資料4－1】
公募条件（案）について【資料4－2】
 5. その他
 - (4) 閉 会

5 議事概要

(1) 開 会

1. 委員長挨拶

(2) 確認事項

1. 前回議事概要の確認について

【第1回議事概要】【第2回議事概要】

[主な意見等]

- ・特になし

(3) 協議事項

1. 技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果について

技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果【資料1-1】

技術動向調査（メーカーアンケート第1回：再依頼）の結果の詳細について【資料1-2】

必要敷地面積について【資料1-3】

技術動向調査（好気性発酵乾燥方式）の結果【資料1-4】

[主な意見等]

- ・県では、一般廃棄物からの熱回収を推奨しているが、昨今のCO₂ネットゼロの議論を踏まえ、改訂中の廃棄物処理基本計画において、熱回収に加えて、マテリアルリサイクルやRDF化についても加えていこうという議論が進んでいる。ぜひ好気性発酵乾燥方式も議論に加えてほしい。（委員）
- ・好気性発酵乾燥方式に関する詳しい資料を提示してほしい。（委員）
- ・好気性発酵乾燥方式を検討することになった経緯を教えてください。（委員）
→焼却以外の処理方法の1例として、市の内部で検討すべきだと話があがった。（事務局）
- ・ごみを燃料として利用する類似した方法としてRDFがある。かつて広域化やダイオキシン対策を目的として広まったが、採算が合わないことなどを理由に全国的に廃止撤退が進んでいる。（委員）
- ・資料1-2のアンケート中のC社は、エネ庁特別会計の交付金の使用を想定しているのか。その場合売電にFITを適用することが出来ない。（委員）
→エネ庁の交付金の使用を想定した回答である。（事務局）
- ・敷地面積が競争性に影響を与ええると言えるのか。アンケート回答の最大値として必要面積を設定するのではなく、同規模施設の敷地面積を参照するほうが現実性は高いのではないかと。（委員）
- ・好気性発酵乾燥方式による残渣を広域連携で焼却することも可能ではないかと。（委員）
- ・県の今後の将来像を考えたときに、全体のフローや環境負荷がどうなるのかが密接に関係してくるので、処理方式についての考え方をしっかり持ってほしい。（委員）
- ・ストーカの必要面積に関する回答に2倍程度の差があるが、理由を詳しく分析してほしい。（委員）
- ・売電の見込みはどれほどあるのか。（委員）
→各社の売電収入の回答では、3億円から10億円と幅がある。（事務局）
- ・ハイブリッド方式を選択する場合、ごみの分別収集形態を変更するのか。（委員）

→ごみを施設受け入れ後に選別するため、分別収集形態を変更する必要はない。メタン発酵に向けたごみのみを発酵槽に投入し、その残渣を焼却する。発酵に不向きなごみは、直接焼却炉に投入する。(事務局)

- ・一般論ではなく、令和3年4月に公募を開始するという栗東市のスケジュールを遵守することを前提に検討しなければならない。国や県の情勢を参考とする必要はあるが、好気性発酵乾燥方式については、製品の受け皿があるという前提がないと他の処理方式と同じ次元で比較できない。(委員長)
- ・好気性発酵乾燥方式は、詳細に検討する時間もなく、課題も大きい。安定処理に逆行するようなことになる。(委員)
- ・好気性発酵乾燥方式は実現性が低いと思うが、今後のごみの分別や広域処理を踏まえると、入口から否定するべきではない。(委員)
- ・委員会で好気性発酵乾燥方式をじっくり評価したという記録を残すことは難しく、1年かけて検討しないといけない。(委員)
- ・現在の環境センターでのごみ処理方式の検討時にも、RDF処理施設の検討をした。(委員)
- ・トンネルコンポスト施設を見学したことがあるが、処理には副資材として木材チップが必要である。香川県三豊市の施設は木材を確保しやすい立地であるが、栗東市が同様の立地であるとは言い難い。また、災害廃棄物を受け入れることが不可能であるので、処理フレーム自体が変わる。(委員)
- ・好気性発酵乾燥方式を他の処理方式と同様に比較するには、製品の受け皿があることが前提となる。次回委員会時に、好気性発酵乾燥方式の内容を含んだ資料を作成すること。必ずしも既出の処理方式と同列で検討を行う必要はないと考える。(委員長)
- ・好気性発酵乾燥方式について、処理物の固形燃料化施設を含めた必要面積を調査すること。また、概算事業費の検討にも上記施設にかかる事業費を考慮すること。(委員長)
- ・K社の参入意欲について再度確認すること。(委員長)
- ・好気性発酵乾燥方式について、製品の利用先確保の見込みについてK社に確認すること。(委員長)

2. 処理方式について

処理方式選定の考え方【資料2-1】

処理方式の比較検討(可燃ごみ処理施設)【資料2-2】

[主な意見等]

- ・検討項目として、環境融和性と社会情勢を追加するべきではないか。(委員)
- ・ハイブリッド方式の必要敷地面積がストーカ式の平均面積を下回っていることについて、1炉構成であることが理由であると理解した。自治体の方針として、1炉構成は許容できるのか。ハイブリッドが1炉構成を想定していることを資料中に明記するべきである。(委員)
- ・各メーカーの施設配置計画図も見たうえで、3haの事業用地面積の必要性を確認すること。また、災害廃棄物の仮置場も含めるのであれば、大きな面積を選んだ方がよい。(委員)
- ・競争性の記述で面積との関係性はないと考えるので、この記述は再考すべき。「よりコンパクトな施設配置が可能な処理方式」では、どれを選ぶことになるのか。今回の基本計画においては、処理方

式を決めることが果たして適切なのか、処理方式を絞り切れないなら複数案を残しても良いのではないか。(委員)

- ・ハイブリッド方式の環境保全性のCO₂はストーカ式より優れていて、少なくともごみ発電が付帯していないことを示してハイブリッド方式は評価すべきである。(委員)
- ・資料2-1の書きぶりでは、あくまでも本年度に処理方式を絞ることを前提に書いているが、絞らないという選択もある。(委員)
- ・むしろ一つに絞る理由が難しい。(委員長)
- ・処理方式を今は決めないが、発注までに決めるという考え方もある。今、決める理由があるのならそれを説明する必要がある。(委員)
- ・ハイブリッド施設を焼却炉1炉構成で運転している事例がある。それらの施設の定期点検時のピットのごみの貯め方など、実際の運営状況について確認を行うこと。また、2炉構成の場合の必要敷地面積や事業費について、メーカーに問い合わせしてほしい。(委員長)
- ・市として見込まれる建設費と運営費の合計について、起債を含めて示すこと (委員長)
- ・廃棄物処理の環境性を示すべきである。温室効果ガスの排出量、リサイクル率の算出を行うべきである。評価項目の順は、安定性、経済性、環境保全性、確保性等でも良いのではないか。(委員長)

3. 事業方式検討調査（メーカーアンケート第2回）の結果について【資料3】

[主な意見等]

- ・意見なし。(各委員)

4. 公募条件について

自治体等におけるごみ処理施設用地の公募事例について【資料4-1】

公募条件（案）について【資料4-2】

[主な意見等]

- ・資料4-2の各事例について、いつの段階の議論であるか資料中に示すこと。(委員)
- ・資料4-1は以下の点を訂正すること。
 - ①彦根愛知犬上広域行政組合は、1度目の公募では締切後の応募の情報を非公開としたが、2度目は公開とした。
 - ②湖北広域行政事務センターは応募自治会のみ公開となっているが、公開であった。
- ・応募時に自治会名の公開を原則とすることにより、その後の公募の事業進行がスムーズとなる可能性が高い。(委員長)

(4) その他

[主な意見等]

- ・既存施設を設計したプラントメーカーに、設計当初の計画ごみ質や蒸気量等から推計されるごみ保有のカロリーを問い合わせた。低位発熱量で 8,700 k J / k g ～11,000 k J / k g 程度保有しているとの結果であった。(事務局)
- ・10 月から月 1 回の頻度で、水を吸ったごみを避けてごみ質調査を行っている。前回報告の通り 10 月の測定結果は 9,240 k J / k g であり、11 月の測定結果は 7,518 k J / k g であり、低質側の範囲内であった。(事務局)
- ・今回の毎月のごみ質分析結果が 1 年間分集積するのはいつか。本当の焼却対象となる状態のごみ質が把握できているか留意すること。(委員)
- ・ごみ質のブレは、2 倍までとは言わないが、一般的に 3 ～ 4 割の変動は普通にみられる。サンプリング時の四分法を確実にやり分析すること。(委員)
- ・次回委員会は、1 月 22 日 (金) 14 時から開催する。(事務局)

以上